

## 感謝をこめて思いたすま

藤 田 宏 (数学教室)

私が物理学科の学生として当理学部に入ったのは昭和23年4月である。数学科の教授として、また、理学部長として停年を迎えようとしている今日現在までに41年が経過した。その間、昭和35年から41年までは工学部にやとわれたが、それ以外の期間は理学部に在籍している。理学部に学び、かつ勤めたこの期間の回想をたどりながら、お世話になった多くの方々への感謝の意を表したい。

昭和23年に東大に入学した私達は標準的には旧制高校の最後から3番目の卒業生である。物理学科に同時に入学した仲間には、遠隔の超新星からのニュートリノはキャッチしたが、惜しくも(いまのところ)ノーベル賞を逸した小柴昌俊君や大学紛争の発端の頃、医学部の学生委員を務めていた藤村靖君、先年惜しくも世を去った平川浩正君、現物理学会長の野野公男君などがいた。ただし、私は1年落第して昭和27年に不破哲三共産党書記長のクラスと合流して卒業した。

卒業後も物理学科には大学院(入学試験などは

なかった)の期間を経て助手まで務め、昭和35年に工学部のいわゆる力学教室(理工学科の一部)に講師として移った。すでにそのときの任務は工学部の学生に応用数学の講義をすることであったが、自分の研究分野が数学に変わって行ったのはもっと早くからである。そもそも、物理に志しを立てたのも、物理が好きであったからと云うよりは、敗戦や父の空爆死などの原体験により、“偉い人間が求め得る確かな価値”を目指してのことであった。下地としては、戦争中も軍国主義の風潮に抗して英語の授業に力をいれ、“学問によって世に立て”と生徒を激励(戦争中では非凡なことである)してくれた母校(旧制浪速高校、7年制)の教育、とくに尋常科時代の教育があった。

物理学科に入って、小平邦彦助教授(当時)や久保亮五助教授(当時)の物理数学の講義を受けた。ともに感動的な両先生の講義であったが、小平先生の講義は数学の高尚さへの誘いを込めたものであり、久保先生のそれは数学の勉強への発奮

を喚起するものであった。物理数学の講義以外でも、いま思えば、応用数学者としても偉大な今井功先生、高橋秀俊先生の講義を受けたのは幸せであった。これらの先生方の影響で数学というよりは数理解析への熱意が醸成された。

最終学年の物理後期でのゼミは、まず山内恭彦先生について物理数学を始めたが、後年アメリカに流出し世界の第一流の数学者になられた、加藤敏夫先生が指導を引き継いで下さった。加藤先生が私の大学院での指導教官であり、助手として奉仕しながら仕込んで頂いた恩師である。加藤スクールの物理数学は当時最先端の数学理論であった作用素論の関数解析を用いて偏微分方程式を主とする数理物理の問題を数学的厳密さで研究することを目標としたものであり、吉田耕作教授やJ. リオンス教授などの国の内外の数学者により高く評価された。

私が助手の頃から、数理科学の大規模な研究班が組織され、全国の数学者、応用数学者、数理物理学者などの接触が盛んとなり、共同研究集会在が頻繁に行なわれた。その成果の一つが現在の京大の数理解析研究所の設立である。おかげで私は上記吉田先生のセミナーに常連的に出席し、また、全国の多くの数学者の知遇を得て、本式の数学の刺激を十分に与えられた。

工学部に移ってからこの状況は続き、自分のペースでの固有の研究と共同研究による刺激が両立して、私としては研究成果があがった時期である。工学部では森口繁一先生や現工学部長の伊理正夫さん等の優れた応用数学者にお近付きになれて幸せであったが、その一人である故鷺津久一郎教授が、私が理学部数学科への異動を相談した際に印象的なことを言われた。「工学部は年寄りをお大切にしますが、理学部は若い人の天下でしょう。教授になって理学部から工学部に移るのは賢明ですが、その逆をやる貴君の気が知れません。」当時37才で、まだ若いつもりであった私は、鷺津先生の折角の忠告に従わなかった。

工学部にいたら果してどれだけ大事に扱われた

かは分からないが、以来数学科では充分大事にして貰った。初期の頃は長老の先輩に支援していただき、終始一貫して尊敬する同僚に啓発され、さらに自分が年を取ってからは、学問の才にも（近ごろ珍しい）愛老精神にも富んだ弟子達に恵まれて、大いに幸せであった。献身的に面倒見がよい数学科の職員の皆さんの親切も大きな支えであった。研究面では些か不完全燃焼の悔いが残るが、私が中途半端の所で停止した課題の多くが、最近に到って後輩の英才達によって著しい進展をみせていることは学者冥利と言うものであろう。

さて、私が理学部に戻って間もなく東大紛争が起こった。昭和43年の秋に交換教授としてパリ大学に滞在していた私は、吉田先生から東大の存立に関わる重大事態が起こっているから直ちに帰国するようにとのお手紙をいただいた。急遽帰国の途についたが、そのときの日航機の中で配られた新聞により東大の全学部長が交替し、新理学部長に久保先生が就任されたことを知った。その年の春頃にニューヨークに居て、コロンビア大学の学生紛争を高見の見物していたのが、今はわが身となり、帰国してみると東大の動乱状態も激甚で数学科の全教授が疲労困憊しておられた。そこへ長期の海外出張で充電したような顔をして帰ってきたものだから、早速に数学科の主任にされ、過激派学生の矢面に立つことになった。数学科は闘争する学生にとって、とくに共闘系の諸君にとって拠点学科の一つであった。

何しろ学生時代の恩師の久保先生が学部長として難局に当たっておられるのであるから、数学科主任として以外にもいろいろ特命を受けた。昭和44年1月18日の早朝に大警官隊が安田講堂他の建物の封鎖を解除するために構内に突入したが、理学部一号館を受け持った第四機動隊の立会い人を命ぜられた私は、伊原康隆助教授（当時）と共に盾を持った巨漢のボディガード付きで本富士署から一号館まで駆け足をした。その直前に封鎖中の一号館で占拠部隊の中にいた数学科の学生数名と単身で深夜会見し、“外人部隊”による容赦の無い

破壊から図書室等を守る相談をした記憶が鮮明に残っている。安田講堂が落城して加藤一郎総長代行が民青系学生に焦点を合わせて収拾を図られてからが、また一苦勞であった。収拾に反対する共闘系の数学科学生が学科闘争を組み、団交を仕掛けてきたからである。当方の若気もあり、数学科の学生となれば同学の後輩であるとの浪速節もあり、念入りに団交に応じた。老教授の主張が学生側のそれと一致したりして主任として慌てる場面もあったが最後は後味の悪くない幕切れを迎えた。学生側に反抗の美学や自己陶醉が過多であるものの、過激な主張のなかにも自分の意見に責任を持つ潔さがあり、最近見かけるような“退廃的な甘え”がなかったせいであろう。最終段階ではやはり単騎（当方）で学生側のリーダーと交渉した。このときの相手をはじめ数学科闘争のリーダーの多くが現在数学の各分野で一流の研究者として重きをなしている。“怪我人”を出さないことを旨とした藤田主任の終結策が悪くなかったのであろう。

紛争の後の改革論議が盛んな頃、小平先生が理学部長になられた。収拾策に流れがちな改革論議のなかで学者の見識に徹すべき理学部の代表とし

ての衆望を担われたわけである。またしても恩師が学部長になられたので、しっかり奉公するはめになった。学部長を補佐する幹事として、教授選考委員会の設置に関する原案を作成した思い出がある。

学問それ自体の推進を別とすれば、やはり、理学部教授会の最大の責務は良い人事の遂行である。自分で学部長を務めてさらにその思いを強くした。ついで、教授会の信任を得て理学部の意志決定に重い責任を持つ、学部長、評議員、各種委員の選挙も、学問の自治につながる真剣な課題である。これらに取組む理学部の伝統的な姿勢は理想に近いものであるが、今後とも理学者に不似合いな思惑・打算などに振り回される事なく“理によって立つ理学部”の筋を貫いて頂きたい。それに、大小様々な教室・施設を抱え、理学を愛すること以外には共通項のない多様な研究にいそむる理学部人の一体感の拠り所として“他者への思いやり”を加えて頂きたい。これが停年直前に学部長を務めさせて頂いた私の理学部の皆さんへの老爺(?)心をこめての遺言である。

長い間、いろいろと有難うございました。